

# 自己愛傾向と対人態度の関連

○前川恵里・宮本正一

(岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部)

Key Words：自己愛、対人態度、モラル・ハラスメント

## ＜問題と目的＞

自分への関心は誰もが抱いており、これは適度であれば生活における活動のエネルギーとなる不可欠なものである。しかし自己愛傾向が高すぎると、その振る舞いは他人との関わりにおいて支障を来たしてしまうことにつながる。小此木（1992）は自己愛傾向が高い人物に共感性がないことを挙げ、その自分本位な対人関係について述べている。さらに、中丸（2001）は、精神的嫌がらせであるモラル・ハラスメントの加害者の特徴として自己愛的な性格を挙げている。この様に、誇大化した自己愛傾向は不適応的な対人態度と関連していると言える。

今日までに行われてきた多くの自己愛に関する研究の中では、自己愛傾向の特徴を細かなタイプに分けて考えることの有効性が指摘されている。また、不適応的な態度は社会的な影響が大きいため、相手との関係によっても表れ方に違いが出てくるのではないかと考えられる。

よって、本研究では自己愛傾向の高低と自己愛的な対人態度の表れやすさの関連について検討する。その際には、相手や自己愛傾向のタイプといった要因についても合わせて考えることとする。

## ＜方法＞

**被験者：**大学生 95 人（男 39 人・女 56 人）

**質問紙の構成：**

**1. 登場人物想定** 被験者にとって「最も親しみを感じており、自分の思いを素直に表しやすい相手」を想起させ、その人物を手順 2. で提示する物語での「相手」とした。相手は「友人、恋人、親」の中から選択させた。

**2. 自己愛的対人態度の測定** 今回は「Ⅰ. 相手が行ったボランティア活動の苦勞話を聞くという場面（共感性の欠如を測定）」、「Ⅱ. 自分が気に入っているレストランへ相手を連れて行ったが、相手の口には合わなかったという場面（自己愛的同一視を測定）」を自己愛的な対人態度を測定する場面として用いた。物語は、被験者がプレゼンテーションソフトで場面に沿った絵を示しながら口頭で提示した。回答は自由記述で行った。

**3. 自己愛傾向の測定** 「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の 3 因子から成る自己愛人格目録短縮版（小塩、1998）を使用した。

## ＜結果と考察＞

**自由記述の分類：**回答をそれぞれの場面ごとに「自己愛的（2 点）」、「中立的（1 点）」、「共感的（0 点）」の 3 通りに分類した。2 場面の得点を合計したものを、本研究における自己愛的対人態度とした。また、分類は心理学を専攻する学生と行った。

**自己愛傾向の高低による分類：**自己愛人格目録短縮版の合計得点を算出し、平均値で低群と高群に分けた。

**自己愛傾向の優位な因子による分類：**自己愛人格目録短縮版の各因子得点を算出した。この 3 因子のうち 2 因子の得点を取り出してそれぞれ個人間比較を行い、グループ分けをした。

**分散分析：**自己愛的対人態度得点の、各要因別分散分析を行った。2（自己愛高低）× 3（相手）の分散分析を行った結果、相手において主効果がみられた ( $p < .01$ )。下位検定を行ったところ、友人よりも親 ( $p < .05$ ) や恋人 ( $p < .01$ ) であるほうが有意に自己愛的対人態度の高いことが示された。また、自己愛の高低における主効果はみられなかった。

さらに自己愛傾向の優位な因子による分類を用いた分散分析を行った結果、自己主張性・優越・有能感の比較に注目した、2（自己主張性優位・優越・有能感優位）× 3（相手）の分散分析で交互作用がみられた ( $p < .05$ )。この時の各水準における得点の平均値を、図 1 に示した。単純主効果を分析した結果、恋人水準において優越感・有能感優位群よりも自己主張性優位群における得点が高いことが示された ( $p < .01$ )。また、相手においては自己主張性優位水準において差がみられた ( $p < .05$ )。LSD 法による多重比較の結果、自己主張性優位水準において友人より恋人のほうが有意に高く ( $p < .05$ )、その他には有意差がなかった。

以上から、自己愛的な対人態度は親よりも友達、さらに恋人が相手である場合に起こりやすくなることが示された。また恋人間においては、優位な自己愛傾向のもたらす恋愛スタイルが相手への自己愛的な対人態度の起こりやすさに影響していることも示された。

今後は、自己愛的な対人態度の例について検討を加え、更に研究を行っていきたい。

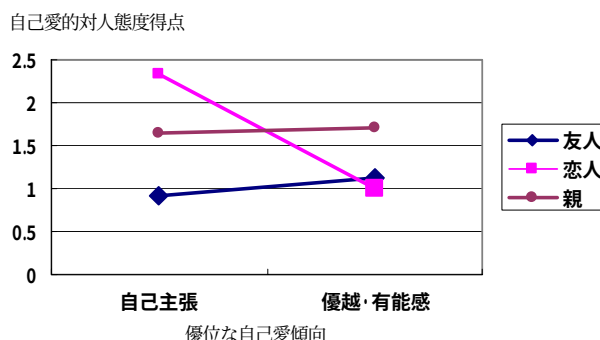


図 1. 優位な自己愛傾向による恋人に対する態度の違い

(MAEKAWA Eri, MIYAMOTO Masakazu)